

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第620号 平成25年10月3日

そして父になる

6年間育てた息子が、実は他人の子であったという事が分かった時、貴方ならいったいどうするでしょうか？

「そして父になる」は、是枝裕和監督による映画で、6年間も親子として過ごして来たのに、ある日突然、その子は病院で取り違えられていた他人の子である事を知らされた父親の、心の葛藤を描いています。

そしてこの映画は、

「親子とは、どういう存在なのだろうか」

「親子という関係が成立する条件は何なのだろうか」

といった重たい問いを、観る者に突き付けているように感じます。



映画「そして父になる」のパンフレットから

映画に出演している、「野々宮良多」役の福山雅治さんとその妻「みどり」役の尾野真千子さん、「斎木雄大」役のリリース・フランキーさんとその妻「ゆかり」役の真木よう子さんは、それぞれ家族の形や暮らしぶり、生き方の違う2組の夫婦を好演しています。

特に福山雅治さんは、エリートサラリーマンで挫折を知らず、傲慢で、良い父親役を演じようとしながらも我が子との間に見えない溝があり、父親になり切れていなかった「野々宮良多」が、子どもの取り違えという事件を通して父親であることに目覚めていくという変化を、巧みに演じていて秀逸です。

それでは「そして父になる」という映画のストーリーを簡単に紹介する事にします。

主人公の「野々宮良多」は、一流大学を卒業し、大手建設会社に勤めるエリートサラリーマン。妻（みどり）と息子（慶多）の3人で高級マンションに暮らしています。彼は、こうした豊かな生活の全ては自分の努力で勝ち取ったものだとして自負しています。それだけに優しい性格で、余り競争心が見られない息子に対しては物足りなさを感じており、それがふとした言動にも表れてしまいます。

ある時、「慶多」が生まれた病院から1本の電話がかかって来るのですが、その内容は余りにも衝撃的なものでした。それは、6年間大切に育てて来た息子が、実は

病院内で他人（斎木夫妻）の子ども（琉晴）と取り違えられていたというものだったのです。

「野々宮良多」は、これ迄の6年間よりも将来の事を考え、結局、血の繋がりを優先しようとし、斎木家との間で、時間をかけ、少しずつ子どもを交換する方向で話が進んでいきます。

最後はどのような結末を迎えるか、それは是非映画を見て確認して欲しいと思います。

産院で子どもが取り違えられるという事件は、最近では聞きませんが、以前、実際にあった事を記憶しています。過去のケースでは、血の繋がりを重視して、子どもは本当の親の元に引き取られている様ですが、もしも私が当事者なら、どの様な選択をしても悔いが残ってしまうに違いありませんし、もしかしたら、自分では子どもを選ぶという選択は出来ないかも知れません。

つまり、その様な逡巡が起こるのは、親子の関係は血の繋がりが全てではないからだだと思います。特に最近では、実の親が幼い子どもを虐待したり養育を放棄して殺したりしてしまうという悲惨な事件が後を絶たず、そうした事件を耳にする度に、子どもが生まれたからといってそれだけで親になれる訳ではないという現実を、つくづくと感じています。

親は子どもを選べませんが、子どももまた親を選べません。その親と子が見えない力で引き寄せられ、子育てを通じて互いの時間を共有する中で、文字通り「形としての親」が「実のある親」へと成長していくものなのではないのでしょうか。「子が親にしてくれる」という言葉がありますが、それは真実だと実感しています。

子どもの取り違えという事件の被害者は、親だけではありません。子どもにとっても、親の取り違えという現実には身を置く事になります。しかも、幼い子どもには選択権がありません。子ども達が、その理不尽な状況に耐えている姿は、不憫です。

子どもにとって血の繋がりは意味をなしません。これ迄の6年間が親子の絆の全てですから、ある日突然「今日から私がお前のパパだ」といわれても、受け入れられる筈はありません。

また、親の立場としても、6年間という時間は特別な時間であり、その濃密な時間は何かに代替できるものではないでしょう。

「野々宮みどり」は、実の子（琉晴）と暮らす中で、その子にも愛情を感じ始めた自分に気づき、「良多」を裏切っているように感じて泣く場面があります。

ある夜、「野々宮良多」、「みどり」、「琉晴」の3人が自宅で過ごしている時、「琉晴」が、「早くパパやママのところに帰りたい」とつぶやく場面があります。彼は子どもながらに、「帰りたい」けれど、それを口にしてはいけないことも知っています。

何かを選ぶという事は、何かを捨てる事だとすれば、どのような選択をしても、そこには癒そうとしても癒し切れない苦悩が付きまとう事になります。

「野々宮良多」は、血の繋がりを優先し、子どもは本当の親が育てる方が将来の為に良いと考えていたのですが、ある日、カメラを取り出し「慶多」が撮りためていた写真を見ていると、「慶多」が自分の知らないところで自分の事を沢山写真に撮っていた事を知ります。「慶太」がどれ程の思いで父親である自分の事を見ていたのか、その息子の思いを知った時、血の繋がりを超えた愛情というものを実感する事になります。血は繋がっていなくても、「自分は6年間、間違いなく慶太の父親だった」のだと。それは、彼が、真に「慶太」の父親になり切れた瞬間だったといえるのかも知れません。（塾頭：吉田 洋一）